

## ニーコラーウス・クサーヌス (承前)

## 服部英次郎

## (三)

絶對的最大者(maximum absolutum)、神は現實的に、存在し得る總てのものである。其故に、其に比べては何物もより大であることの出来ないもの、即ち最大者(maximum)であることを共に、其に比べては何物もより小であることの出来ないもの、即ち最小者(minimum)である。<sup>\*</sup>即ち絶對的 maximum は、其の外に何物をも有しないが故に、總ての反對を免れ、従つて其に於ては最大者と最小者とは歸一する。其は最大者と最小者との、又一般に總ての反對者の統一である。<sup>\*\*</sup>

<sup>\*</sup>最大者と最小者との歸一の論證に見出される、ブラードクスを其の種々の解釋に就ては、J. Unger, Die Gotteslehre des N.

C. 1888 S. 17—20 參照。

<sup>\*\*</sup>クサーヌスは此の「反對者の歸一」といふことがアリストテレーヌの形式論理學に反對するもの即ち此の論理學の根本原理たる矛盾律と相容れないものであることを意識した最初の人であつた。B. Croce, Lebendiges und Totes in Hegels Philosophie, Deutsche Übersetzung von K. Büchler, 1909 S. 33(三木清氏辨證法の理論と歴史)に參照。さて、其が辨證法の歴史に屢々引合に出されることは正當である。併し此の原理はたゞ絶對者神に於てのみ眞實である、即ち、辨證法は、クサーヌスに於ても亦、何よりも神の論理であつたのである。

彼は此を種々の表現を以て言ひ表はして居る。例之、「總ての、加之、矛盾的諸反對者の綜合 (omnium complicatio etiam contradictoriorum. D. I. I, 22.)」「矛盾的諸反對者の、單一な統一に於ける結合」(copulatio contradictoriorum in unitate simpliciter. De Coniect. I, 8.)「諸反對者の綜合を其等の歸一」(Complicatio oppositorum et eorum coincidentia. I. c. II, 1.)併し最もよく用ひられる表現は「諸相反者の、諸反對者の、或は

矛盾的諸反對者の歸一」(Coincidentia Contrariorum, opposi-  
torum oder contradictoriorum. I. c. II. 2. etc.)である。

絶對的最大の者は有限者の領域に屬する如何なる  
反對によつても規定されない、其は總ての肯定と  
否定とを超越する。存在と考へられる總てのもの  
は存在すると同様に又存在しない。非存在と考へ  
られる總てのものは存在しないと同様に又存在す  
る。絶對的最大の者は總てのものであるが故にこれ  
であり、又何物でもないが故に總てのものであ  
る。其は何よりもこれでないが故に何よりもこれ  
である。絶對的最大の神は光であるといふと  
き、其の意味は、何よりも光でない神は何よりも  
光であるといふに他ならない。何となれば、若し  
さうでなければ、絶對的最大の神は現實的に、存在  
し得る總てのものではなく、無限ではなく、總て  
のもの限界ではなくして、恐らく他の或る物に  
よつて制限されるであらうから。

ニーコラーウス・クサーヌス(承前)

併し、如何にして諸反對者が絶對的最大の者に於  
て歸一することが可能であるか、其は勿論我々の  
悟性を超越する。我々の悟性は矛盾的諸反對者を  
統一に結合することは出来ない。其故に我々は、  
總ての比量的思惟を越えて、絶對的最大の者が無限  
であり、其には何物も對立せず、そして其には最  
小者が一致するのを見る。(De docta ignor. I. 4)

如上によつて、絶對的最大の者が或る概念によつ  
ては認識され得ず、又或る名稱によつては命名さ  
れ得ないことは明かである。名稱によつて命名さ  
れ得るものは、たゞ、其に比べてより大なるもの  
より小なるものが存する物のみである。其故、如  
何なる屬性を絶對的最大の神に歸すべきかは  
不可解である。否、其を定めることは不可能で  
ある。

併し、其は先づ第一に「統一」(unitas)と呼ぶこ  
とが出来ぬ。即ち數の領域に於てひとは必然的

に、其に比べてより小なるものが存することの出  
來ないもの即ち最小者に達する。此は統一(單位)  
である。統一は、何物も其より小であることが出  
來ないが故に、絶對的的最小者である。そして其は  
最大者に歸一する。併し統一は數であることは出  
來ない、何となれば、數は増加を許すから。其は、最  
小者であるが故に、總ての數の始源 (Principium  
omnis numeri) であり、そして最大者であるが故  
に、同時に總ての數の終極 (Finis omnis numeri) で  
ある。其故、其に何物も對立しない「絶對的統一」  
(unitas absoluta) は絶對的の最大者、神に他ならな  
い。此の如き統一は多數化されない、何となれば、  
其は存在し得る總てのものであるから。

此の如く我々は數に導かれて、神は本來は命名  
され得ない、併し彼には、何よりも先づ「絶對的  
統一」が屬するのを、そして神は現實的に、可能  
のである總てのものであるやうな仕方、一であ

るのを認識する。又數が統一を其の始源として根  
柢に置かねばならず、そして其なしには存在する  
ことが出來ないやうに、物の多數は無限の統一か  
ら由來し、其なしには存在することが出來ないで  
あらう。(U, 5.)

次に絶對的の最大者には「絶對的の必然性」(absoluta  
necessitas) が屬する。絶對的の最大者以外の總ての  
ものは、其に比べては有限であり制限されて居  
る。其等は、有限であり制限されたものとして、始  
源と終極目的とを有しななければならない。さて始  
源や終極目的はたゞ與へられた有限者より大であ  
るに過ぎず、其自らは有限であるのであつてはな  
らない。其故に、現實的の最大者は必然的に總ての有  
限者の始源と終極目的として存在しななければなら  
ない。又、若し絶對的の最大者が存在しなければ、  
何物も存在することは出來ないであらう。總ての  
有限者は、其自らからは存在せず、他に其の原因

を有する。さて原因を求めて無限に溯ることは許されない。其故に、絶對的最大の存在しなければならぬ、そして其なしには何物も存在することは出来ないであらう。

次に、絶對的最大の存在に關係せしめよう。

而るとき最大存在者は如何なる反對をも、即ち存在をも最小存在をも有しない。其故に、最大者は存在し得ないとは決して考へることが出来ない。

何となれば、最小存在 (*minime esse*) は、其に於ては、最大存在 (*maxime esse*) であるから。又、絶對的最大の存在に對して、種々の問と答とがなされるが、而かも其等は總て、或る無限者を、即ち無限な眞理を豫想する。そして其は絶對的最大の者に他ならない。

此の如き、又他の其と類似の推理によつて、最大者は、絶對的必然性である、そして其故に存在しなければならぬことは明かである。(I, 6.)

此の如き、最大存在者は最後に「三位一體の永遠性」(*trina et una aeternitas*) である。即ち變易に先行するものは永遠である、さて統一は變易に先行する、其故に統一は永遠である。同様に、相等は不等に、結合は分離に先行する、其故に其等も亦永遠である。併し永遠なものとはたゞ一つである。其故に統一と相等と結合とは一である。此がピューターゴラスが始めて説いた三位一體 (*trina unitas*) の教説である。(I, 7.)

統一から統一との相等が生れ、そして統一と統一との相等とから結合が生れる。さて出生 (*generatio*) とは、統一の反復か或は父から子に移行する同一の性質の増加かである。併し後の種類の如き出生はたゞ消滅的な物に於てのみ見出される。統一の統一からの出生は統一の反復、或は統一の一倍である。私が一を二倍或は三倍するとき、一は其自ら或る他の物を、即ち二とか三とか或は其他の數

を生む。併し統一は、一度反復されれば、統一との相等を生む。此は取不直、統一が統一を生み、そして此の生出が永遠であることに他ならない。

(I, 8.)

次に統一の統一からの出生が統一の反復であるやうに、兩者からの發出はかの統一の反復の反復である。或は統一と統一との相等との合一とも言ふことが出來よう。併し此の如き發出とは言はゞ一つのものから他のものへ連互である。例之、二つのものが相等しいとき、其等を言はゞ結合し連結する相等が一のものから他のものへ連互するのである。其故、統一と統一との相等から結合が生れるといふことが出来る。何となれば結合は統一から相等へ、そして相等から統一へ連互するから。

併し我が教父達は、統一を父と呼び、相等を子と呼び、兩者の結合を聖靈と呼んだ。其は勿論被

造物を考慮してのことであらう。×そして此こそ、ピューターゴラス的方法による最も明かな統一に於ける三位の、又三位に於ける統一の叙述である。(I, 9.)

如上、絶對的最大の者の理念の概念的 analysis によつて、これだけのことが確立される。即ち絶對的の最大者、神は存在し得る總てのものである。其に最小者が歸一する最大者として、總ての反對の統一である。其は唯一、絶對的必然的、三位一體である。併し此の如きことは總て我々の概念的認識を超越し、我々の比量的思惟によつては理解され得ない。(I, 10.)

併しながら、我々は此の神祕を比較によつて明かにすることが出来る。既に古の聖賢達が言つたやうに、總ての可視的なものは眞實は、不可視的なものの映像である、そして其自體は我々に不可解な物も象徴によつて探求されることが出来る。

何となれば、總てのものは互に、其は勿論我々には知られないが、或る關係に立ち、總てのものは一なる最大者に於ては一者其のものであるから。

勿論模倣は、其の本性上、原型に同一化する程近似するやうに見えても、前者は後者に、其が尙ほ無限により近似しより相等しくあることの出來ない程、近似し相等しくあることは出來ない。其故に、我々は絶えず動搖不定の状態にある感覺的事物を捨てて、我々にとつて最も信頼すべき抽象的なものに依らなければならぬ。そして數學の命題こそは正に此の如きものである。古の優れた學者達は困難な問題の解決をたゞ數學的方法によつてのみ求めた。ピューターゴラスのことはさておき、最も學識ある羅馬人、ポーエーティウスは、數學に修熟しない者は決して神的なものを知ることが出來ないと言つた。又アウグスティヌスが言つたやうに、創造されるべき物の數は、創造主

の心に於ては、最初の原型であつた。我々も亦此の古人の開いた道を歩まう、そして數學的象徴を其の全然信頼すべき確實性の故に利用しよう。何となれば我々は象徴によつてのみ神的なものに到達することが出来るのであるから。(U. II.)

併しながら、總ての數學の圖形は有限である。そしてたゞ有限としてしか考へられることすら出來ない。其故、我々は無限なものに到達するためには、其どの單なる類似を越えなければならぬ。我々は、此等の有限な象徴を無限なものへの上昇の範例として用ひるときは、次のやうな手續によらなければならぬ。即ち先づ數學的象徴を、有限なものとして、其の變化と意味とを考察し、次に此等の意味を同一の無限な圖形に對應的に移し、そして最後に、此等の無限な圖形の意味を、更に進んで、總ての圖形を超越した絶對的無限者に適用しなければならぬ。かくすることに

よつてのみ我々は有限なものを越えて無限なものに到達することが出来るのである。(U, 12)

我々は先づ無限の線を考へよう。若し此の如きものがあるなら、其は直線であるだらう、三角形、圓、球であるだらう。さて先づ、無限の線は明かに直線である。次に圓の直径は直線である。そして周邊は曲線であり、直径より大である。さて此の曲線は、其の圓が大きくなるに従つて次第に其の曲率を減じる。従つてもはや其より大きくあることの出来ない最大の圓の周邊は、最も小なる度合に於て曲であり、最も大なる度合に於て直でなければならぬ、従つて最小者は最大者に歸一する。

第二に、無限の直線は無限の三角形であり、圓であり、球であると言はれる。此を證明せんがためには我々は、有限の線に於て何が其の可能性の中に存するかを見なければならぬ。我々は既

に、有限の線はより長くより直であることが出来るのを、そして最大の線は最も長く最も直であるのを知る。さて次に、 $\pi$ といふ線分が或る定點の周圍を廻轉するとき、先づ一つの三角形、そして最後に一つの圓が生じる。そして半圓の一つが直径の周圍を廻轉するとき、最後に一つの球が生じる。球は線の勢位から生じる最後の産物である。さて若し有限の線の中に此等の諸圖形が可能的に存するなら、そして又無限の線は現實的に、有限の線が可能的にある總てのものであるなら、此からして無限の線は疑もなく三角形、圓、球であることが歸結する。(U, 13.)

此の如く、無限の線は、無限の現實性に於て、有限の線の可能性の中に存する總てのものである。(Infinita linea est omnia illa actu infinite, quae in potentia sunt finita.) 絶對的の最大者に就いても同様である。最大者は最高度の現實性に於て、絶

對的單一の可能性の中に存する總てのものである  
 (maximum est actu maxime omnia illa, quae in  
 potentia sunt simpliciter absolutae.) 即ち最大者  
 は現實的に此等總てのものである。其にも拘ら  
 ず、最大者は可能的者からは由來せずに、常に最  
 高度の現實性に於て存し、そして此の如きものと  
 して正しく總ての可能的者である。如之、絶對的  
 可能性其のものも、最大者に於ては、現實的の最大  
 者に他ならない、無限の線が又無限の球であるが  
 やうに。併し此の如きことは、たゞ最大者に於て  
 のみあり得る。最大者以外に於ては、可能性は現  
 實性ではない。恰かも有限の線が三角形でないや  
 うに。最大者は、其故に、其に於て最小者が同時  
 に最大者であるところのもの、總ての反對を無限  
 に超越するところのものである。

\* クサーヌスに於ても、アリストテレスの權威を斥けようとする  
 力強い努力にも拘らず、彼の「可能的」を「現實的」その反定立  
 は尚ほ思想の形式をなして居る。J. Whitaker: Nicholas of

ニーコラーウス・クサーヌス (承前)

Cusa, Mind. Vol. XXXIV. 1925 P. 44 參照。併し此は勿論  
 彼の眞面目ではな。

絶對的の最大者、神は、總ての存在者の中最も單  
 一な存在者である。現實的にあり、あつた、又あ  
 るであらう總てのものは、其に於て常にあり、永  
 遠に其等自らである。其は、其自らであると同様  
 に又總てのものである。其は、同時に總てのもの  
 でありそして特に彼等の中何物でもないやうな仕  
 方で其の各である。そして無限の線が總ての線の  
 最充全な標準であると同様に最大者は總ての存在  
 者の最充全な標準である。其は最小者であるが故  
 に、より大でなく、最大者であるが故により小で  
 ない。其故に、無限な存在者は總ての存在者に對  
 して最充全な最正確な標準である。(Est igitur  
 adaequatissima et praecissima omnium essentiarum  
 mensura infinita essentia. I, 16.)  
 たゞ其の標準 (mensura) であるのみならず又其

の根據 (ratio) である。即ち、無限の線が有限の線の根據であると同様に、絶對的最大の者は總てのものに對して居る。さて、有限の線は互に甚だしく異つて居る。或るものは長さ二呎あり、或るものは長さ三呎ある。其故に、其等の根據も亦異らなければならぬやうに見える、併し其はたゞさう見えるだけである。無限の線に於ては二呎と三呎との長さは異なる、そしてかの無限の線は明かに有限の線の根據である。其故に、二つの線に對する根據はたゞ一つである。其の差異は異なる根據 (根據はたゞ一つである) からは由來せず、或る偶性から由來する。即ち線は全く同じ仕方では根據を分有することは出来ない。同様に、總てのものに對してたゞ一つの根據があるのみである。そして其の根據を總てのものは異なる仕方では分有するのである。其故に、全く相等的しい仕方は一なる根據を分有する全く相等的しい二つのものはあり得な

い。(I. 17.)

絶對的最大の者は第一には言はゞ最大の線であり、第二には最大の三角形に比較されるべきである。最大の三角形に於ては、三邊の各は無限である。併し一つより多くの無限の邊はあることが出来ない、其故に三邊は總て唯一つの無限の線である。併し最大の三角形は現實的な三角形である。そして其は三邊なしにはあることが出来ない。其故に、かの無限の線は必然的に三つの線である、そして三つの線は一つの線である。同一のことは角に就いても眞實である、たゞ一つの無限の角があるのみである。此の一つの角は三つの角である、そして三つの角は一つの角である。又最大の三角形は邊と角とによつて組立てられることは出来ない。無限の線と無限の角とは同一である。此の如く、三角形は線であるが故に、線は角である。(I. 14.)

此の如き、同時に最單一な線である、現實的な三角形は三位一體の象徴である。相違と非相違とは此に於ては反對ではない。相違が同時に非相違である場合、三位は統一である。反對に非相違が同時に相違である場合、統一は三位である。同一のことは差格の多數と本質の統一に就いても眞實である。多數が統一である場合、差格の三位は本質の統一と同一である。反對に統一が多數である場合、本質の統一は差格に於ける三位である。さて、無限の三角形は其の眞の存在上三つの角を要求する、其故に無限の三角形に於ては現實的に三つの角がある、そして其の各は最大の角であり、三つの角は總て一つの最大者をなす。さて此に於ても同様である。最單一存在者の統一は、其の眞の存在上、三差格を要求する、そして其の各は神であり、三者は總て一神である。加之、かの三角形は一つの角が他の角でないことを、而かも三つ

の角は何等かの三つの異なるものではなくして一であることを要求する。此の如きことは又此にも適合する。父は子ではない、子は聖靈ではない、而かも此等は三神ではなくして一神である。此の如くにして我々は、一と三ではなくして、一にして同時に三なる存在、即ち三位一體的な存在 (*non unum et tria, sed unitivum seu trinum*) を有するであらう。(I, 19)

さて三位一體に就いて尙ほ次のことが注意されるべきである。即ち、最大者は三位一體のであつて、四位一體的或は五位一體的或は多位一體的ではない。何となれば其は最大者の單一性と完全性にと反するから。即ち多角形は各、最單一な要素として其の中に三角形を有する、そして三角形は、其に比べてはより小なものがあり得ない最小の多角形である。

絶對的最小者が最大者に歸一することは既に示

された。さて統一の數に對する關係は取不直三角形の多角形に對する關係である。其故に、總ての數が統一に還元されるやうに、總ての多角形は三角形に還元されることが出来る。併し、其と最小の三角形が歸一する最大の三角形は總ての多角形を包容する。何となれば、最大の統一が總ての數に對する關係は即ち最大の三角形が總ての多角形に對する關係であるから。さて、四角形は最小の圖形ではない、何となれば、三角形は其よりも小であるから。其故に、常に複合されて居らねばならず、そして最小者よりも大である四角形は、絶對的の最大者と全然一致することは出来ない。最大者にして同時に四角といふことは矛盾である。何となれば、其は三角形に對する標準であることは出来ないだらうから。其故に、其は總てのもの標準でないが故に、如何して最大者であり得ようか。又其は或る他のものから生起し複合的であ

り、從つて有限的であるが故に、如何して最大者であり得ようか。(I, 20.)

神は統一である、此の如きものとして彼は無限の圓に比較されるべきである。何となれば、此は統一と單一との最も完全な圖形であるから。其に於ては總ては無限であり、無限なものとして一である、即ち中心、直徑、周邊は同一である。

此からして我々は、其に最小者が對立しない彼者は不可解的な最大者であることを知る。最大者は最も完全な仕方であるものの中にある、何となれば其は無限の中心であるから。其は總てのもの外にありそして總てのものを包容する。何となれば其は無限の周邊であるから。其は總てのものを貫く、何となれば其は無限の直徑であるから。其は總てのもの始源である。何となれば其は中心であるから。其は總てのもの終極目的である、何となれば其は周邊であるから。其は總て

のもの、能動的仲介者である、何となれば其は直径であるから。絶對的最大の者は能動因である、何となれば中心であるから。形相因である、何となれば直径であるから。目的因である、何となれば周邊であるから。其は存在を與へる、何となれば中心であるから。其は導く、何となれば直径であるから。其は保持する、何となれば周邊であるから。最大者は何物とも同一ではなく、又何物とも異なる。其の總てを含む統一は存在と非存在とを、存在する總てのものと存在しない總てのものを包容する。總てのものは彼の中に、彼から、彼によつて存在する。何となれば其は言はゞ總てのもの、周邊、直径、中心であるから。(Apprehendistaque per intellectum quomodo maximum cum nullo est idem, neque diversum, et quomodo omnia in ipso ex ipso et per ipsum, quia circumferentia, diameter, et centrum. I, 21)

ニーユラーウス・クサーヌス (承前)

以上によれば、神は總てのもの、反對者さへもの綜體である、其故に彼の攝理も亦總てのものを、矛盾さへをも含む、其は其の統一に於て、起るものをも、又起らないが併し起ることの出来るものをも含む。神の攝理は不變である、何物も其を避け其を免れることは出来ない、其故に總てのものは、攝理に關係せしめれば、必然的と考へられる。そして其は正當である、何となれば、神に於ては總てのものは神であり、絶對的必然性であるから。併し我々は次の如き事實を見逃してはならない。神は多くのものを豫め決定することが出来たであらうが併し決定せず又決定することを欲しなかつた。又反對に、神は彼が抑止することが出来た多くのものを攝理によつて決定したのである。(I, 22)

\* 我々は此の節の前半に於て全然汎神論的なものを見出す、併し其の附加された後半に於て普通の超越神論への接近を見出す。

此は一層整合的なアルーンの汎神論からは消え失せた讓歩である。アルーンは言ふ、無限の宇宙に於ては總ての可能性は實現されて居る、神に於ては意志と力と行爲とは同一である。[Whiteaker, op. cit. p. 446 参照。]

最後に球は、線の中に存する可能性によつて現實的に存在する最後の産物である、そして全然現實的である。絶對的の最大者も亦全然現實的である。そして球が線、三角形、圓の現實性であるやうに、最大者は總てのものの現實性である。總ての現實的なものは、其の有する現實的存在を彼に負うて居る。そして其が無限者に於て現實的にある限に於てのみ、現實的である。無限者に於ける實存在は獨自の實存在に對する規範である。永遠な實存在は時間的な實存在に對する規範である。其故に、絶對的の最大者は諸形式の形式であり、存在の形式或は最大の現實的存在である。(maximum est forma formarum et forma essendi sivema xima actualis entitas.)

總ての未完成者は彼に於ては最完全者であり、不完全は完全であり、單なる可能性は無限の現實性である。絶對的の最大者は言はゞ最大の球である。其故に、其が全宇宙と宇宙に實存する總てのものに對する唯一、最單一、最充かな標準であることは明かである。(Videmus nunc clare, cum maximum sit ut sphaera maxima, quomodo totius universi et omnium in universo existentium sit unica simplicissima mensura adaequatissima. I, 24)

其故に如上の數學の諸圖形と絶對的の最大者との間には或る完全な平行が存立する。無限の線は同時に三角形、圓、球である。神の無限の存在は三位一體、統一、現實的實存在である。無限の線は單一無限存在を、無限の三角形は統一に於ける三位と三位に於ける統一とを、無限の圓は絶對的統一を、最後に球は現實的實存在を象徴する。

如上の論理を其の窮極にまで進めるとき「肯定神學」(theologia affirmativa)の不充分なことが認められ、そして其の訂正的補足として必然的に、「否定神學」(theologia negativa)が要求される。

(I, 24—26.)

神は、何等の反對者を有しない最大者であるが故に、本來は如何なる名稱も彼には屬しないことは明かである。何となれば、總ての名稱はたゞ或る個物のみを指示するから。「一にして總て」(unus et omnia)或は其よりも「統一に於ける總て」(omnium in unum)といふこそ、神の本來の名であるたらう。如何なる肯定的名稱も神には適用されない。創造主といふ名すら、たゞ被造物との關係に於てのみ適用される。若し彼を眞理と呼ぶなら、虚偽が對立する。徳と呼ぶなら、不徳が對立する。本體と呼ぶなら、屬性が對立する。其の他のことに就

ても亦同様である。「統一」(unitas)といふ名は最も近いやうに見えるが、無限に眞理から遠ざかつて居る。三位一體と其の諸格の名も、肯定的名稱であるが故に、たゞ人間の精神に於ける區別を考慮してのことである。

異教に於て神に歸せられた種々の名稱は世界に於ける自然力の多様に關しての名稱として理解される。併し此等の種々の名も實はたゞ一の言ひ表はし難い名の展開に他ならない。そして異教徒間の素朴な民族が陥つた偶像崇拜は世界に展示された神の諸表出に心をどめて、神其のもの純粋な統一を崇めなかつた結果である。彼等は、種々の表出を象徴として用ひるべきであつたのに、其を眞理其のものど考へたのである。

併し異教徒を笑ふ者も、自らが偶像崇拜に陥つて居るのを見出す。宗教が神に就いて、其は已むを得ないことではあるが、我々が被造物に就いて

知る最善のものを肯定する限、即彼を一にして二、最賢、近づき難き光、生命、眞理等々と呼ぶ限、尙ほ偶像崇拜が存する。

其故に、否定神學は肯定神學の補足として不可缺的である。そして其がなければ、神は無限の神としてではなく寧ろ被造物として崇められるであらう。(Et ita theologia negationis adeo necessaria est quo ad aliam affirmationis, ut sine illa Deus non coleretur ut Deus infinitus, sed potius ut creatura.) 神は命名され得る總てのものより無限に大であるが故に、言ひ表はすことは出来ない。我々は、始めて偉大なダイーオーニューシウスが教へたやうに、「除去と否定」によつて一層眞實に神に就いて語るであらう。(Verius per remotionem et negationem de ipso loquimur.) 神は眞理でも理性でも光でもなく、父でも子でも聖靈でもない。又如何なる他の名稱によつても指示され得ない。

無限者として考へられるとき、神は一でも多でもない。神はたゞ無限である。従つて神は此の世界に於ても、又未來の世界に於ても認識され得ない。如上によつて神學に於てはたゞ否定のみが眞であり、肯定は常に不充分であることは明かである。何となれば、肯定は常に神を被造物に引下げから。併し次のことに注意しなければならぬ。即ち、一層不完全なものを最完全者なる神から除去する否定は他の否定よりも正しい。例之、神は石でないといふのは神は生命或は理性でないといふのよりも、神は酪酩でないといふのは神は徳でないといふのよりも正しい。又其に對應して、肯定に於ては、神は理性或は生命であるといふのは、神は土、石、或は物體であるといふのよりも正しい。

藝術家は木材から王の像を作らうとするときには、彼が心に考へて居る王の像以外に制限された

總てのものを除去する。さて汝は神を、ひとが考へ得る總てのものより優れるものとして考へるとき、汝は具體的であり制限されて居る總てのものを、物體性を、感覺を、想像力を、悟性を、理性を除去する。簡言すれば、汝は何物も汝の中に神

に似たものを見出さない。汝は其故に、神は此の如き總てのものを超越して、其から汝に、汝が有する總てのものが流入る汝の精神生活の原理であると言ふ。偉大なデューオーニューシウスが言つたやうに、神の認識は「或るもの」によりは寧ろ「無」に導く。併し聖なる無知は、理性にとつて無であるやうに見えるものこそ正しく理解す可からざる最大者であることを教へる。(Et propterea magnus Dionysius dicit intellectum Dei accedere ad nihil quam ad aliud. Sacra autem ignorantia me instruit, hoc quod intellectui nihil videtur esse maximum incomprehensibile. I, 17.) 神は絶對的

無である。そして我々はファウストがメフィストフェレスに答へたやうに、「無の中に總てを見出すことを期待する」(In deinem Nichts hoff' ich das All zu finden.) のである。

#### (四)

世界即ち宇宙(mundus seu universum)は神でない總てのものを、従つて制限され對立的である總てのものを包括する。たゞ神にのみ正確な相等性は屬する。彼以外の總てのものは分化し互に不等である。何物も正確に他の或る物と相等しいものはない。何等の限界が歸せられない段階が、最大者にも又最小者にも達することなしに、續いて居る。幾何學的圖形に於てすら、現實的相等は不可能である。何物も他の或る物と、形に於て又大きさに於て、正確に一致するものはない。正確な均衡が行はれるのはたゞ抽象的な規則に於てのみである。又數の算術的觀念も正確には適用されない。

何人も他の誰かど何等かの點に於て相等しいものはない。そしてひとは、假令他人を模倣すること、に千年を費しても決して正確に模倣することは出來ないであらう。尤も目に見える相違は時として知覺されないことがあるかも知れないけれども。物の變化はたゞ連續的段階によつてのみ起ることが出来る。

次に此の如き分化者の綜體としての世界も亦無限である。併し此の無限性は神の其から嚴密に區別されるべきである。絶對的の最大者としての神のみが眞實の、現實の無限性を有する。其は、古きスコラ學派の用語法に従つて「否定的無限」(negative infinitum)と呼ばれる。即ち其の各部分も、一般に部分が其に於て考へられる限、又無限である。そして其に於てはより多くとより少くが存しないからである。<sup>\*</sup> 此に反して世界は「缺如的無限」(privative infinitum)と呼ばれる。即ち其は終極な

く限界を有しないからである。そしてたゞ、其によつて制限される或る現實的により大なるものが存しない限に於てのみ、無制限的である。併し其は、其の可能性上、制限されて居る。そして其が事實上存するより大であることは出來ない。其故、ひとは又其は有限でもなく又無限でもない (nec finitum nec infinitum est) と言ふことが出来るであらう。(II, 1.)

\* J. Cohn, Geschichte des Unendlichkeitsproblems im abend-ländischen Denken bis Kant. 1896. S. 89. 參照

此の如く神と宇宙とは概念的には鋭く區別されて居る。無限者と有限者との間には何等の關係も存立しない。併し他方、神と世界との間には或る關係が存立しなければならぬ。何となれば、神は存在することの出來る總てのもの其故に又世界であり、そして後者は其自らから存在することは出來ない。「其自らからの存在」(a se esse)はた

神にのみ屬する)。其故に世界は神から以外には存在することが出来ないから。併し如何にして世界が神から存在するかは理解することが出来ない。即ち被造存在者の可壞性、分割性、不完全性、差異性、多數性等々は如何にして説明されるか。無限の線は直線であり、そして線の總ての存在の原因である。さて、曲線は線としては無限の線によつて存在する、併し其が曲である限は無限の線によつて存在することが出来ない。何となれば彎曲こそは正しく有限性の結果であるから。被造存在に就いても同様である。其は絶對的の最大者によつて存在することは出来ない。何となれば其は減少分離等々して居るから。そして其の減少相違分離等々は何等の積極的原因を有しない。即ち其の統一が多數に、其の差異が混亂に、其の結合が不一致に存立することは神からは由來せず、又或る他の積極的原因からも由來しない。其は偶然

的である。被造物には其から存在する絶對的必然性と、其なしには存在しない偶然性 (*in creatura necessitas absoluta, a qua est, et contingentia, sine qua non est*)とがある。即ち神でもなく又無でもない被造物は言はゞ神の後にそして無の前に、神と無の間にあるやうに見える。其にも拘らず、被造存在は存在と無とから複合されてあることは出来ない。其は、存在から低下せる故に存在せぬやうに、無以前にあるが故に存在しないことのないやうに、又兩者から複合されても居らぬやうに見える。反對者を超越することの出来ない我々の悟性は被造物の存在を分割によつても又複合によつても理解することは出来ない。尤も、被造物の存在はたゞ最大者の存在によつてのみあることを知るけれども。

併し被造物は最大者の存在によつて創造されたから、そして最大者に於ては存在と行爲と創造と

は同一であるから、(神の)創造とは神が總てのものであることに他ならないやうに見える。(Quoniam vero creatura per esse maximi creata est, in maximo vero idem est esse, facere et creare, tunc non aliud videtur esse creare quam Deum omnia esse)さて神が總てのものであり、そして此が即ち創造であるなら、被造物が、神の存在は永遠であり否永遠性其のものであるのに、永遠でないことは如何にして理解されるか。被造物は神の存在である限は、疑もなく永遠である。併し其は時間的である限は、神によつては存しない、何となれば彼は永遠であるから。最後に、神は存在の形成的原理であり、而かも被造存在を混合しないことを誰が理解することが出来ようか。何となれば無限の線と有限の曲線とから或る複合物は生起しない、そして複合は或る關係なしには考へられない、併し何人も有限者と無限者との間には或る關

係が存在することの出来ないのを疑はないから。曲線の存在は無限の直線から由來し、而かも無限の直線は曲線を、其の形成的原理としてゝはなく其の原因を根據として形成する。併し此の根據を曲線は其の部分となすやうに分有することは出来ない。何となれば其は無限であり不可分割的であるから。又ひとは被造存在を神的存在の鏡に比するであらう。併しさうではない、何となれば鏡は或る對象の像を映す前に既に存在しなければならぬから。

如上、無限の原理はたゞ有限的にのみ受容せられる、従つて總ての被造物は言はゞ有限な無限性或は創造された神である(Quoniam ipsa forma infinita non est nisi finite recepta, ut omnis creatura sit quasi infinitas finita, aut Deus creatus,)そして最善の仕方にて存在する。各の被造物は其としては完全である、假令或る他の被造物を考慮しては

不完全であつても。總ての被造存在は豊富に神から有する彼の完成に於て休息する。各の被造物は、一層完全であると想はれる他の被造物にならうとは欲せず、何ものよりも、彼が最大者から有する其自らの存在を神の賜物として愛し、此を不可壞的に保持し完成することを望むのである。(II, 2.)

以上によれば、世界は其の起源上又存在上一つの神祕である。併しながら、我々は其を比較によつて明かにしようとするとき、此に於ても亦數學的象徴が其の最善の補助手段である。即ち、恰かも數が統一の展開として、線、面、物體が點の展開として、運動が靜止の展開として、時間が現在の展開として理解されるやうに、神に於ても事物の多數は包含されそして彼から展開されると考へることが出来る。神は、總てのものが彼の中にあることによつて總てのものを包含する。そして神

は、彼が總てのもの、中にあることによつて總てのものを展開する。(Deus ergo est omnia complicans in hoc quod omnia in eo; est omnia explicans in hoc quia ipse in omnibus.) 即ち神の中に存在するものは又世界にも存在する。神に於ては包含的に、世界に於ては展開的に。併し此の如きことは我々の悟性には理解されない。何となれば其を考へることは又もや反對者の歸一を要求する、そして其を我々の悟性は決して越えることは出来ないから。

\* 彼はエビクール派のアトミステイクを無神の見解として斥けながら、此に一種のアトミステイクに陥つて居る。(J. Cohn, op. cit. S. 68.)

我々は此を數によつて説明しよう。數は統一の展開である、さて數は理性的なものを示す、そして理性的なものは精神から生起する(従つて精神を有しない非理性的者は數へることが出来ない)。其故に、恰かも我々の精神から、我々が多くの個

物を共通なものに屬するものとして認識することによつて、數が生起するやうに、物の多數は神的精神から生起する。そして其に於ては多數者は多數性なしに存在する、何となれば其は包括的統一であるから。即ち物は存在の相等性を、相等しい仕方で分有することが出来ないが故に、神は永遠に於て或るものをかく、他のものを別に考へ給うた。其からして多數性が生起した。併し其は彼自らに於ては一である。併し此の如き包含と展開との方法は勿論我々の悟性を超越する。

其故に物を神なしに考へるときには物は、恰かも統一なき數のやうに無である。神を物なしに考へるときには神は存在し、そして物は無である。神なしには世界は無である而かも彼の存在ではない。世界は同時に存在と無とである。其故に、物の多數性は神が無にあることによつて生起すると  
(quod puritas rerum exoriatur eo, quod deus est

in nihilo.) ことが出來よう。(II, 3.)

世界即ち宇宙は具體的の最大者 (maximum contrarium) として表はされることが出来る。具體的者 (Contractum seu concretum) は其があるところの總てのものを絶對的の最大者から有し、そして其を出來得る限模倣する。其故に後者に屬するものは又前者にも、併し勿論制限された仕方で屬する。宇宙は絶對者の似姿である。されば世界の神からの起源は其自體は不可解であるけれども原因から結果に推理することによつて、世界に就いても多くの解明を得ることが出来る。

神は絶對的の最大者にして絶對的の統一である、其は相違せるもの對立せるもの、例之矛盾せる反對者に先行し、其を結合する。其は、其故に、絶對的に總てのものであるところのものである。總てのもの、絶對的原理でありそして物の終極目的である。其に於て、總てのものが多數性なしに區別

されずに存する存在即ち絶對的最大の者である。恰かも無限の線が總ての圖形を其の中に包含するやうに。同様に世界即ち宇宙は具體的最大の者であり、唯一者であり、具體的反對者に、即ち相反者に先行する、其は具體的に、總てのものであるところのものとして實存在する。總てのものに於ける具體的被制限的原理であり、物の具體的終極目的である。其に於て、總てのものが多數性なしに存する存在即ち具體的最大の者である。恰かも最大の具體的な線が總ての圖形を其の中に包含するやうに。

絶對的統一は總ての多數性なしである。而るに具體的被制限的統一即ち宇宙は、唯一者最大の者であるけれども、複合せられたものとして、多數性なしではない。何となれば其はたゞ唯一の最大具體的者に過ぎないから。其は唯一者ではあるけれども、而かも其の統一性は多數性によつて、其の單一性は複合によつて、其の永遠性は繼起によつて、其の

必然性は可能性によつて制限されて居る等々。

次に、恰かも神が日にも月にも存しない（尤も彼は其等に於て其等が絶對的にあるところのものではあるが）やうに、宇宙も亦日にも月にも存しない（尤も宇宙は其等に於て其等が具體的にあるところのものであるけれども）宇宙は具體的存在者として、具體的な日に於てと具體的な月に於てと異つた仕方で存する、其故に其の統一性が多數性に存立するやうに宇宙の同一性は相違性に存立する。（*hinc identitas universi est in diversitate,*

*sicut unitas in pluralitate.*）其故に宇宙は日でも月でもない、而かも日に於ては日であり、月に於ては月である、そして其が日と月とである點に於て多數性と差異性となしである。宇宙は普遍性を即ち多數者の統一を表はす。（*Universum dicit unitersitatem, hoc est unitatem plurimum.*）人間性はノークラテースでもなくプラトーンでもなくして、

ソークラテースに於てはソークラテースであり、プラトーンに於てはプラトーンである。其と同様に宇宙は總てのものに關係する。

宇宙は具體的原理であり、そして正しく其の點に於て最大者であると言ふことが出来る。其故に具體的最大者の絶對的最大者からの單一的流出によつて全宇宙が存在するやうになつたことは明かである。併し總ての存在者は、其が宇宙の部分である限、そして其なしには宇宙は具體的な唯一の全體的な完全な宇宙であることは出来ないだらうが、宇宙と共に存在するやうになつたのである。古の流出説に於てのやうに、時間的な、段階的な流出を認めることは出来ない。藝術家の意圖に於て全體例之家が部分、例之壁よりも前にあるやうに、神の意圖から總てのものが存在に移行したとき、先づ宇宙がそして續いて總てのものが(其なしには宇宙は宇宙ではなく又完全ではなから

う)存在するやうになつたのである。其故に、抽象的なものが具體的なものに存するやうに、抽象的最大者は具體的最大者に於て先行者として考へられる。従つて其は、絶對的に總ての具體的なものに含まれて居るが故に、總ての部分に存する。何となれば、神は世界即ち宇宙の絶對的通性原理であるから。併し宇宙自らは具體的通性原理である。(Est enim Deus quidditas absoluta mundi seu universi. Universum vero est ipsa quidditas contracta.) 宇宙は此であれ、其であれ、或る存在者に關して具體的と言はれる。唯一者なる神は一なる宇宙に存する、併し宇宙は具體的に制限されて總てのものの中に存する。かくして、單一的統一なる神は、彼が一なる宇宙に實存在することによつて、言はゞ此の宇宙の媒介によつて、總てのものの中に存し、そして物の多數性は又一なる宇宙の媒介によつて神の中に存することが理解される

であらう。(Et ita intelligi poterit quomodo Deus, qui est unitas simplicissima, existendo in uno universo, est ex consequenti mediante universo in omnibus, et pluralitas rerum, mediante uno universo, in Deo, II, 4.)

以上のことを正確に考察することによつてアナクサーゴラスの「一切のものは一切のものにある」(quodlibet in quolibet)といふ言の眞理性の根據を、そして其を彼自らよりも一層深く理解することは難くないであらう。即ち前節によつて明かであるやうに、神は、總てのものが彼にあるやうに總てのものにあり、そして又今確かめられたやうに、神は宇宙の媒介によつて總てのものにあるが故に、總てのものが總てのものにありそして各のものが各のものにあることは明かである。

宇宙はたゞ被制限的のみにみ物に存しそして各の現實的に存在するものは、現實的に其があるところ

ニーコラーウス・クサーヌス(承前)

るものであらんがために、宇宙を含む。併し現實的に存在する總てのものは神の中に存する、何となれば彼自らは總てのものゝ現實性であるから。現實性は可能性の完成と目標とである。宇宙は各の現實的に存在するものに於て被制限的(具體的)原理である。其故に宇宙の中にある神が各の存在者の中に存することは明かである。恰かも宇宙が直接的に神の中に存するやうに。「一切のものが一切のものにある」といふのは、神が總てのものによつて總てのものに存し、そして、總てのものが總てのものによつて神に存することに他ならぬ。 (Non est ergo aliud dicere quodlibet esse in quolibet, quam Deum per omnia esse in omnibus et omnia per omnia esse in Deo.)

併し此に注意すべきは、其は自然哲學的原理ではなくして形而上學的原理とされて居ることである。かくしてこそ我々は其を「アナクサーゴラ

「ス自らよりも一層深く理解する」ことが出来るのである。即ち、如何なる現實的なものも、大なり小なりの割合による總ての元素の混合なしには存しない、其故に如何なる物理的要素も其の純粹性に於ては殘餘のものから分離されないといふのではない。さうではなくして、各の特殊なものは宇宙に於ける他の諸物を、其の有機的統一に於ける全體を形成せんがために指示するといふのである。各のものは各のものに依存する。何となれば一つの段階は或る他の段階なしにはあることが出来るから。恰かも身體に於て各部が各部に關係し、そして總てのものが總てのものに含まれて居るやうに。<sup>\*</sup>即ち、眼は現實的に手や足や其他總てのものであることが出来ないが故に、眼は眼であり、足は足であることに満足する。そして總ての部分は、各のものが最善の仕方で其があるところのものであらんがために、相互に支持し合ふ。眼

に於ては手は手ではなく、足は足ではなくして、其等は眼である、そして、眼として直接的に人間に存する。同様に總ての部分は足に存し、そして足として直接的に人間に存する。其故に各の部分は各の部分によつて直接的に人間に存し、そして人間は各の部分によつて各の部分に存する。此の如くにして神と世界との類似性は明かにされる。(II, 4.)

\* J. Whitaker, op. cit. P. 450—51 參照

次に世界は、神の三位一體に對應して、三位一體を示す。具體的統一は統一として三位一體である。併し、其は絶對的な仕方に於てはなくして、例之、全體が部分に存立するやうに、具體的な仕方に於てはある。そして此の三位は可能性即ち質料 (possibilitas sive materia) と形相 (forma) と結合 (complexio) とである。何となれば、具體的者は、具體的になり得るものと、具體的ならしめ

るものと、兩者の共同的活動によつて始めて成し遂げられる結合なしには考へられることが出来なから。(II, 7.)

併し可能性は絶對的ではない、絶對性はたゞ神性にのみ屬するから。第一原理を除いた總てのものは必然的に相對的である、其故に相對的可能性から區別された絶對的可能性があることは出来ない。物に於ては可能性は常に限定されて居る。若し可能性が限定されて居らないなら、物の理性的根據を存せず總てのものは偶然によつてあるであらう。其故に世界は、其が現在ある制限された仕方以外に於ては、存在することは出来なかつたであらう。(II, 8.)

次に又可能性の實現のために世界靈魂の假説を導入することも許されない、何となれば世界靈魂がありとすれば、其は現實的無限者と有限者との中間者として考へられねばならぬだらう、併し

此の如きことは考へられないから。宇宙の精神と靈魂の間に階段を置くことは斥けられ總てのものは諸形式の形式 (*una forma formarum*) 即ち神の單一性に歸せられる。物の諸形式は、其等が具體的である限に於てのみ異つて居る。併し其等が絶對的である限に於ては何等の區別なしに一である。

「一の無限な範例のみが必要にして充分である」  
(*Unum infinitum exemplar tantum est sufficiens et necessarium*) 成程、我々は世界に於て相異なる物の根據を區別しなければならぬ、併し此はたゞ相對的に(具體的者として)考へられた物にのみ關係し、總てのものゝ最單一な根據には關係しない。絶對的者と相對的者との間には中間力は存しない。(Solum enim Deus est absoluta, omnia alia *contracta*) 神のみが、此等のものが絶對的として考へられる限は、世界の靈魂にして精神である。(II, 9.)

併し一つの間隔力が、他の仕方にて導入せられる、其は運動である。其は宇宙の精神であり、可能性と現實性との、質料と形相との結合の原理である。自然は言はゞ運動によつて生起する總てのもの、綜體である。(Unde natura est quasi complicatio omnium quae per motum funt.) 此の運動即ち精神 (motus sive spiritus) は神的精神より來る、そして其によつて可能性は現實性に現實性によつてのやうに總てのものを統一に結合する、其故に總てのものから一宇宙が存立することが出来るのである。此の運動によつて物は、各他のものと異つて、動かされて、若し出來ればよりよき状態に於て彼等を維持する。そして性の結合によつて種を維持する。そして最後に此の如き相對的秩序に於ては絶對的に最大である運動はない。何となれば、最大の運動は静止と歸一するから。

(II, 10.)

前節に於て神の無限性から否定神學が歸結したやうに、世界の無限性から新しい宇宙觀が提出される。(II, 11—12.)

世界は周邊を有しない。何となれば若し世界が中心と周邊とを有するなら、其は其自らの中に始源と終極とを有し、或る他のものによつて制限されるであらう。併し此の如きことは眞理に背反するから。そして世界は絶對的に無限ではないけれども、而かも有限であると考へることは出来ない。何となれば世界は其の中に包み込まれる限界を有しないから。其故に地球は世界の中心ではない、又恒星界は其の周邊ではない。尤も、地球を天と比較すれば地球は中心に、天は周邊に近いやうに見えるけれども。世界の中心は地球の内部よりも

寧ろ外部にある。否地球も又他の或る天體も中心を有しない。何となれば、中心とは周邊から等距離にある點であり、そして尙ほより完全であることの出来ない程完全な球や圓が存在することは不可能であるから。世界の中心である神は、又地球の、總ての天體の、そして世界の總てのものゝ中心である。彼は同時に總てのものゝ無限の周邊である。(Qui est centrum mundi, scilicet Deus benedictus, ille est centrum terrae et omnium sphaerarum, atque omnium quae in mundo sunt, qui est simul omnium circumferentia infinita.) 次

に天には固定せる不動の極はない。天の各部分

は、不等ではあるけれども、運動しなければなら

ない。或る星は最大の圓を、他の星は最小の圓を

描くやうに見える。併し圓を描かない星はない。

天球には周定せる極がない、其故に、兩極から等

距離に隔たる中心もないことは明かである。天球

の極は中心と一致する、従つて中心と極とは他ではない、神である。如上によつて地球が運動することは明かである。

此の如き新しい大膽な宇宙觀が、勿論其の先蹤はあつたけれども、全く論理的に彼の形而上學的原理から導き出されたことは注目に値する。(J. Whittaker, op. cit. p. 453 参照) 併し、其は又他方、後の數學的自然科學に基く新天文學に著しい對比をなすものである。

此の如きことを古代人は知らなかつた、併し、我々にとつては、此の地球が實際に運動することは全く明かである。尤も我々は其に氣付かないけれども。何となれば、我々は運動をたゞ或る不動者と比較してのみ知覺するのであるから。若しひとが水の流れるのを知らず又岸を見ないなら、如何して彼は、舟に乗つて水上にありながら、舟が動くのに氣付くだらうか。同様に、彼は地球に、太陽に、或は或る他の星にあらうと、自分は或る不動の中心にあり、そして總てものは自分の周圍を

廻轉するに見えるであらう。世界の構造は言は  
 かうである、其は到る處に中心を有し、そして何  
 處にも周邊を有しない、何となれば中心と周邊と  
 は神であり、そして神は何處にもあり何處にもあ  
 らぬから(Unde erit machina mundi quasi habens  
 ubique centrum et nullibi circumferentia, quoniam  
 circumferentia et centrum Deus est, qui est ubique  
 et nullibi,)

最後に宇宙に於ける地球の地位に就いて一言し  
 なければならぬ。地球は傳統的に、唯一の腐敗  
 と墮落の領域と考へられて來た。併し此は誤つて  
 居る。我々の地球は「最も低く卑しい」(vilissima  
 et infima)といふやうな拘はれた見解は全然斥け  
 られねばならない。宇宙の他の部分にある者に  
 は、地球も亦一つの輝ける星のやうに見えるであ  
 らう。又地球にのみ人間は住むのではない。併し  
 地球以外の諸星に、他の種類の人間が住むからと

て、其に住む人間が我々に優つたものであるとい  
 ふことは歸結しない。何となれば地球に住む我々  
 の知性より優れたものは存在しないから。そして  
 人間は、或る他の性質をではなくして、たゞ彼自  
 らの性質に於て完全であることを求めて努力する  
 のである。(未完)

前回(第六十六號)誤植訂正

頁	段	行	誤	正
一〇九	上	三	ヤーススの思想	ヤーススの思想家
一一一	上	一八	Individuum	Individuum
一一二	上	一	諸地の大學に	諸地に
一一二	上	一六	勤誘	勸誘
一一三	下	七	防げた	妨げた
一一五	下	一〇	Fuchen	Bucken
一一八	上	一一	完全理解する	完全に理解する